

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちがまず、知っておくべきなのは、日本という国は、^A必然的に自然災害が多い地域にあるということです。地震はしょっちゅう起こっているし、津波も昔から何度となくやってきています。Ⅰ 台風や大雨による土砂崩れや^{*}冠水なども、日本のどこかで毎年のように起こっています。これは地理的な条件からそうなっているのですから、私たちはそれを前提として生きていくしかありません。

日本では昔から自然災害に見舞われ、ときには今回の東日本大震災のように、^①甚大な被害を受け、それを嘆きながら、それでもたくましくそこから立ち上がってきました。その過程で、一部の人は、災害から学び、防災・減災の知識を身につけ、^{*}啓蒙活動や防災システムの^aコウチクに努力する一方で、大部分の人は徐々に忘れていくということを繰り返してきました。

忘れるというのはもちろん、本書で触れてきた人間の性質が原因です。どんなに辛いことを経験しても、時間が経つとそのことをだんだん忘れるのが人間です。また判断が欲得や便利さに流されやすい一方で、「こうあって欲しい」「見たくない」といったほうには目が向かないのも人間の性質です。そのため、ときには目の前の^B危険を平然と無視してしまうこともあるのです。

それは必ずしも悪いことではなく、人生を楽しく快適なものとして暮らすための一つの知恵です。しかしそれがときには大きな災難をもたらす原因になることは、自然災害の国である日本に暮らす以上は知っておかなければなりません。

そしていま恐ろしい^Cのは、都市の防災機能が極めて^{*}脆弱なことです。第二次大戦後の日本、とくに高度成長期以降の日本は、社会の変化、技術の進化とともに、都市の拡大と集中を進めてきました。しかし残念ながら、その拡大と集中の過程は、時間の流れでいうと、災害忘却の過程と軌を一にしています。たしかにビルの耐震基準などは、たびたび変更され、以前に比べると、新しい建物ははるかに倒壊しにくくなっています。Ⅱ 古い建物はそのま

ま残ったままですし、都市が防災・減災を考えながら設計されているかという点、そんなことはないのです。

今回の津波災害で「未曾有」といえるのは、原発事故もさることながら、油の流出や建造物、自動車、船の破壊による有害物質の流出などによって、被災現場の後、シマツが非常に困難を極めていることでしょう。

そう考えると、今後都市で起こる自然災害が、以前とはまったく違った厄介な姿として、私たちの前に立ち現れる可能性がります。

今回の震災は、私たちが忘れていた災害の怖さを思い出させてくれたものであったのと同時に、これからの災害の形も私たちに示しているのです。

(中略)

一ついえるのは、どんな形であれ東海地震も南海地震も必ずやってくるということですが、私たちはそのことを数の中に入れながらこれから行動しなければならぬし、社会の運営も当然そうしなければならぬでしょう。それが②自然災害が必然となっている「日本で生きる」ということではないでしょうか。

どんな物事にもすべて表と裏があります。悪いことだけではなく、いいこともあるのです。自然はときどき人間に意地悪をしますが、それ以上に多くの恩恵も与えています。

Ⅲ 大津波に襲われた三陸の、美しい景観や豊富な海の幸などは、まちがいなく自然が与えてくれる恩恵です。私は学生時代に、初めて訪れた三陸の景観と海の幸がすっかり気に入る、その後、新婚旅行でも、三陸を旅行先に選びました。

私たちが大好きな温泉だって、危険な火山活動が源になっています。③これもまた自然の力の表の面の一つです。四季折々の美しい情景、豊かな水資源なども、日本という国土が置かれている場所が、私たちにもたらしてくれたものです。

自然は人間にとっていいことと悪いことの両方を与えてくれます。それがいいことだったら恩恵、悪いことだったら災害です。残念ですが、恩恵だけを受け取るのは無理なのです。

Ⅳ 災害はうまく「すかす」しかありません。失敗と同じように、災害もまた、だれにとっても辛く嫌なもので、できることなら避けたいものです。しかし一方

でこれらは、使いようによっては、人間を成長させる糧になります。少なくとも私たちの先人は、この日本でそのように生きてきました。地震や津波、台風などの自然災害は、「人間が望もうと望むまいと勝手にやってくる自然。ケンシヨウである」と考えて、忌み嫌うのではなく知恵を使いながら上手に付き合ってきたのです。

「日本人とは、自然災害から学んできた人々のことである」という言い方もできると、私は思っています。寺田寅彦の言葉を引用しておきます。

「——わが国のようにこういう災禍の頻繁であるということは一面から見ればわが国の国民性の上に良い影響を及ぼしていることも否定し難いことであって、数千年来の災禍のシレンによって日本国民特有のいろいろな国民性のすぐれた諸相が作り上げられたことも事実である」(「天災と国防」より)

自然災害は、私たちがこの日本で生きていくかぎりには、避けては通れない宿命です。そうであるなら、むしろこれらと前向きに付き合うようにして、そこから多くの知恵をサズかるようにしたいものです。

そしてその知恵とは、自然に對抗するという方向ではなく、「いなす」とか「すかす」という発想で使うべきではないでしょうか。

科学技術の進歩は人間に大きな力を与え、いつの間にか人間は「力で自然に對抗できる」と考えるようになりました。しかしこれは④大きな誤解です。自然の力は想像以上に強大で、人間が力で同じように對抗できるようなものではないのです。そのことを私たちは今回の大津波から学ばなければなりません。

もちろんそれは、自然災害に力で對抗するのは無理だから「なにもしなくていい」ということではありません。力がないからこそ、知恵で對抗することを考えなければいけないといっているのです。

自然災害を力尽くで押さえ込むことはできませんが、知恵を使ってある程度コントロールすることは可能です。そこで重要になるのは自然と「闘う」のではなく、自然と「折り合う」という考え方です。自然の力をうまく逃がしながらも、最も被害を出したくない大切な場所だけを重点的に守るということ。

日本に暮らす以上、自然災害は避けて通ることができないものですが、無理をすることなく知恵を使いながら

まく付き合っていくことが大切ではないかと思っています。

(畑村洋太郎「未曾有と想定外―東日本大震災に学ぶ」より 一部改編)

【語注】

冠水 〓 洪水などのために田畑や作物などが水をかぶること。

啓蒙 〓 教え導くこと。

脆弱 〓 もろくて弱いこと。

未曾有 〓 今までに一度もなかったこと。また、非常にめずらしいこと。

糧 〓 カづけるもの。

忌み嫌う 〓 嫌って避ける。ひどくいやがる。

諸相 〓 いろいろなすがた。ようす。

問一 〓 線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓 線部 A 「必然」の対義語として最も適当なものを後から選び、記号で答えなさい。また、——線部 B 「危険」と同じ組み立ての熟語を後から選び、記号で答えなさい。

A 「必然」の対義語

ア 平然 イ 偶然 ウ 当然 エ 全然

B 「危険」と同じ組み立ての熟語

ア 拡大 イ 地震 ウ 今回 エ 原発

問三 〓 線部 C の「——」線部 D 「ない」と種類・性質が同じものとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

C 「の」

ア 台風が来たら危ないので、これは家の中にしておこう。

イ 今年、弟の書いた作文が、町内のコンクールで入賞をした。

ウ ひとりひとりの意見が、学校全体の雰囲気を変えていった。

エ お年寄りとゆっくりと話をするのがとても大切なのである。

D 「ない」

ア この店には欲しい品物が置いてないので、他の店をさがそう。

イ 部屋がともきたないので、今すぐに掃除をはじめなさい。

ウ 今日は大変暑いので、熱中症にならないように注意しよう。

エ 休刊日で新聞がないので、インターネットでニュースを見た。

問四 〓 I s IV にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使ってはいけません。

ア しかし イ また ウ たとえば エ だから

問五 〓 線部 ① 「その過程」とありますが、どのような過程ですか。本文中の言葉を使って、四十五字以内で説明しなさい。

問六 〓 線部 ② 「自然災害」とありますが、筆者は自然災害をどういった方法で制御すべきだと考えていますか。本文中の言葉を使って、八十字以内で説明しなさい。

問七 〓 線部 ③ 「これもまた自然の力の表の面の一つです」とありますが、「表の面」を別の言葉で言いかえた表現を本文中から漢字二字でさがし、ぬき出して答えなさい。

問八 〓 線部 ④ 「大きな誤解」とありますが、どういうことを指していますか。「科学技術」という言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問九 本文中の筆者の主張として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自然災害は避けて通ることができないもので、科学技術の知恵を発展させ、できるだけ被害を抑えるのが大切である。

イ 自然災害こそが、日本人のすぐれた部分を作り上げてきたものである。自然災害が起きるのを前向きに待つのが大切である。

ウ 自然災害は必ず起きるものであるから、それを受け入れ、知恵を使いながら自然と前向きに付き合っていくのが大切である。

エ 自然災害の中で特に地震は日本で起きる可能性が高いので、日ごろから地震に対して食料などを備えるのが大切である。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

騒がしいクラスが一週間ほど続いたある日、年度初めの発言通り、はじめて①本物のギャングになった。

授業中うるさいクラスの中で急に立ち上がり椅子と机を軋ませた。その音が周囲を圧倒するほどで、教室内はにわかにしーんと静まりかえった。

「せんせいさ、やめちやえば」

声の物差しはごく普通。とくに大きかったわけではなく、むしろ、抑制されていた。

それでも、しんとしたクラスの中では、*、んんんんんん 殷々と響き渡った。

そして、俊輔はくるりと後ろを向くと、後ろの黒板のまわりに飾ってあるクラスの旗を剥がしはじめた。おもしろがって他の男子が追従し、クラスの代表旗に決められた「てるてる旗」にまで手を掛けた。破ろうとしても布

製だから簡単にはいかないのだが、ちよつとしたほつれから一〇センチほど裂け目が入った。

呆然とする晃道の前で、「やめてっ」と悲鳴があがった。佐倉彩花だった。

晃道もはつとして、「やめなさいー」と声をあげた。例によって規格外の大声。教室がびりりと震えた。「みんなで決めた旗です。それを勝手に破るなんていけません」

「先生は叱る時のルールを破りました」と俊輔。「一度、注意しても、直らないときに叱るんじゃないんですか」

② うっ、と一瞬言葉を呑み込んだ。

でも、それは違う。

「もし誰かが怪我をしそうなことだったら、その場で叱ります。③ ルールにはそう書いてあります」

「旗を破っても、誰も怪我しません」

「いいえ、怪我します。④ 心だつて怪我をするんですから」

大声の迫力に押されたのか、俊輔は一步後ずさった。

それでも、また強い目で晃道を見返してから、席に戻った。そのままずっと晃道を見続ける。晃道の

⑤ を追うかのように。誰かに似ていると思つたら……そうだ、俊輔の父親と母親とそっくりの視線。

「さあ、前の時間からはじめている理科の観察のまとめを続けましょう。五月からはひまわりが大きくなるのを観察してきました。六月にはモンシロチョウの幼虫を観察しましたね。どちらについて書くか決めて、まとめ方をこの前考えました。下書きはできてますか。最初は鉛筆で。自分の観察だけではなく、調べたことを付け加えてもいいですよ。夏休みの自由研究の練習です」

晃道の声かけて作業を開始するのは、やはり少数だ。

真面目に授業に参加しようとしている子たちには、本当に申し訳ない。いや、申し訳ないのは、クラス全体にだ。経験豊かな先生なら、この子たちもきちんと授業を受けられるはずなのだから。

やがて、騒がしいなりに、授業に参加している子は作業に集中しはじめた。一瞬「ギャング」になった俊輔すら、

C 手のひらを返したように作業に取りかかっている。相変わらず授業を無視しているのは二人の大輝と、影響された男子・女子たち。

晃道は、後部の黒板のところまで歩いていき、床に落ちた小さな旗を拾い集めた。大きく裂け目の入った「てるてる旗」には、胸が痛んだ。今、補修する時間はないから、ロッカーの上にとめて置いておき、教室の机の間を巡回した。

窓際でさわいでいる椿海大輝、つまり、マサキのグループへ。マサキの机を取り囲んで、なにかのカードゲームに興じている。

⑤ なるだけ静かな落ち着いた声で、「カードは学校に持ってきちゃいけないことになってたよね」と声をかけた。「みんな、持ってきてるじゃん」

「授業中に出しているのはきみたちだけだよ。ルールを守っていないのを注意するのは、もう二度目か三度目だから、放課後までカードは預かります」

「なんでー おれだけなわけー」とマサキが晃道の腕に飛びついた。そして、そのまま掴み損ねて床に倒れた。また頭を打った。そんなに激しい打ち方ではなかったし、マサキもへらへらしていたので放置した。爪を立てられた晃道の腕の方がかなり出血し、クラス常備の救急箱から絆創膏を出して手当てしなければならなかったほどだった。

そして、もう一人の大輝。タイキは、またも机の下に籠もって、周囲の床に座り込んだほかの子たちと、おしゃべりに夢中だった。

「おーい、今、何の時間かな」と近づくと、「あ、てるてる先生」と無邪気な顔で言った。

「ほら、これみて！ 白亜紀モンシロチョウ」

観察ボード上の画用紙の中、ティラノサウルスの隣にその頭くらいの大きさがある巨大なモンシロチョウが飛んでいた。また、背後には巨大なキャベツが描かれていて、これまた巨大な幼虫が這っていた。

タイキは絵がうまい。自分の関心があることしか描かないとはいえ、先月の理科で観察したことを取り入れている

わけで、タイキは彼なりにちゃんと授業を消化している。

「その絵、すごいと思う。でも、今は、授業中。ちゃんと座ってられないかな」

「だって、ここ落ち着くんだよお」

「でも、タイキくんが、そこに潜ると、ほかの子も真似するだろ。先生は、授業中は椅子に座ってほしいんだ」「分かった」

タイキは意外とすんなり納得して、机の下から出た。

⑥ ほっとしてその場を立ち去ったら、すぐに悲鳴が響いた。

甲高く、D よう、というのはまさにこのことだと思った。ざわついていたクラスが、またもしーんと静まった。声の主はタイキだ。悲鳴をあげた後、そのまま体を硬くして頭を両手で抱えている。

「どうしたのっ」

晃道はかけつけた。

「だって……だって、だって……」タイキは、ろれつが回らない。

タイキの後ろに座っている女子が、近くの男子たちを指さした。

二人とも、手に鉛筆を持っており、机のまわりにいくつもの鉛筆や消しゴムが、床に落ちていた。さっきはこんなことはなかったから、わずかな時間で、鉛筆でチャンバラか何かをして、床にばらまいてしまったのだろう。

「てるてるせんせい、消しゴムが飛んだのよ」タイキの後ろの席の女子が言った。「それでタイキくんに当たって……」

「消しゴムって、当たったって痛くないだろ」

そう言ったら、すでにタイキは机の下に潜っていた。授業のあいだ、もうそこから出てくることはなかった。いや、そこから先、授業は崩壊し、授業とは呼べなくなった。

【語注】

殷々 Ⅱ 音のさかんさま。とどろくさま。
ろれつ Ⅱ 言葉の調子。

問一 —— 線部A「追従」、—— 線部C「手のひらを返したように」の本文中での意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「追従」

- ア 反抗してそっぽを向くこと。
- イ 他人の言動の通り動くこと。
- ウ 追いかけるために走ること。
- エ 頭を下げて、謝罪をすること。
- C 「手のひらを返したように」

- ア 事前に打ち合わせた通りにすること。
- イ 相手の反応を見ようとする事。
- ウ 突然思いついたようにふるまうこと。
- エ 態度などをがらりと変えること。

問二 —— 線部B「 」が「こまかな一つ一つの動作や行動」という意味の語句になるように、二つの空欄に後の（ ）内から熟語をそれぞれ選び、六字の熟語を完成させなさい。また、 D にあてはまる言葉として最も適当なものを後から選び、記号で答えなさい。

B

(拳手・挙動・举足・投手・投石・投足)

- D ア 胸を打った
- イ 竹を割った
- ウ 絹を裂いた
- エ 泡を食った

問三 —— 線部①「本物のギャング」とありますが、具体的には何がどういう状態だといのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 教師が、生徒のために一生懸命に努力している状態であること。

イ 教師が、騒がしいクラスを押さえつけている状態であること。

ウ クラス全体が、授業をきちんと受けない状態であること。

エ クラス全体が、まとまって協力しようとしている状態であること。

問四 —— 線部②「うっ、と一瞬言葉を呑み込んだ」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒である俊輔から純粋な質問をされ、動揺を隠せなかったから。

イ 生徒である俊輔から自分が間違っていることを指摘され、反省したから。

ウ 生徒である俊輔から教師を馬鹿にするようなことを言われ、腹が立ったから。

エ 生徒である俊輔から論理的な反論をされ、たじろいでしまったから。

問五 —— 線部③「ルールにはそう書いてあります」とありますが、なぜ晃道は「ルール」の話をするのですか。本文中の言葉を使って四十文字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部④「心だって怪我をする」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの子が、みんなで決めた旗を破られることを悲しく思うこと。

イ 佐倉彩花が、クラスをまとめられない晃道に、がっかりすること。

ウ 俊輔が、クラスの旗を破ってしまったことに、罪悪感を持つこと。

エ 晃道が、クラスをまとめるために作った旗が破られて怒ること。

問七 —— 線部⑤「なるだけ静かな落ち着いた声で」とありますが、晃道はなぜそのような声で話したのですか。「反抗的」「刺激」という言葉を使って、三十五文字以内で説明しなさい。

問八 ——線部⑥「ほっとして」とありますが、なぜこのような気持ちになったのですか。「タイキ」、「晃道」という言葉を使って、五十字以内で説明しなさい。

問九 ——線部⑦「すでにタイキは机の下に潜っていた。授業のあいだ、もうそこから出てくることはなかった」とありますが、なぜですか。「タイキはく」に続く形で、二十五字以内で説明しなさい。

問十 この文章の主題を次の三つの言葉を使って、四十字以内で説明しなさい。

(クラス全員・晃道・苦惱くわう)